準特選

（小学生 三・四年生）

「ドックントックン救命医」

私立京都聖母学院小学校　三年　仁井　奏多

ぼくの心ぞうはドックンドックンと音がします。ぼくの大すきな犬のメイプルの心ぞうはトックントックンと音がします。手を当てると分かります。心ぞうががんばって血えきを送り出している音です。

ぼくの心ぞうは一才の時、止まりかけました。おもいおもい病気にかかったからです。

お医者さんが、

「奏ちゃん生きるよ。」

と言ってマッサージをしてくれました。お母さんは、

「奏多を助けてください。」

と神様にお祈りしました。そうして今もぼくの心ぞうは音を出しています。

いのちってなんだろうと考えました。よく分かりません。でも「生きている」ことは分かります。歩いたり走ったり、泣いたり笑ったりするのは生きているからです。

ぼくの夢は、救急救命医になることです。こまっている患者さんの所へドクターヘリに乗って助けに行きます。「いのち」がとても大切だって分かります。

患者さんもメイプルもぼくもみんないのちを持っています。ドックントックンと音がします。いつも音が聞こえるように守るのです。「生きるよ。」って言えるお医者さんにぼくはなりたいです。

講　評

僕の心臓の音は「ドックンドックン」、飼い犬のメイプルは「トックントックン」。少し違うが、どちらも頑張って血液を送り出す音。一歳の時に心臓の病気になったが、医師の処置と母親の祈りによって、今も心臓は音を出すことが出来ている。「『いのち』とは何か分からないが、泣いたり笑ったりできるので、生きていることは分かる。将来は救急救命医になって、みんなの心臓の音が聞こえるように守りたい」という素直な決意で締めくくっている。